Ⅰ　音楽科　研究テーマ

「音楽のもと」を根拠とし、思いをもって音楽と豊かに関わる子どもを育む学び

Ⅱ　研究の重点

試行錯誤しながら、よりよい表現を目指す子どもを支えるための学びのデザイン

Ⅲ　３年次の成果と課題

1　成果

(1)　本物から学ぶ　～目の前のモデルの生演奏～

３年次の実践でも、試行錯誤しながら、よりよい表現を目指す子どもを支えるための学びとしてゲストティーチャーの活用を取り入れた。２年次では、中学生をゲストティーチャーとして迎え、手を伸ばせば届きそうな中学生の歌声をモデルとすることで、子どもは音楽活動の目指したい具体的な目標を思い描くことができた。そして「学びのものさし」を自発的に見付け出し、更新することができた。今年度は、「日本の音楽」民謡に取り組むにあたり、プロの民謡歌手として活動している方々をゲストティーチャーとして迎えた。ＣＤや動画などでは味わうことのできない本物の迫力のある演奏を体感・体験したり、これまでの学びで蓄積してきた音楽的な力を引き出しながら学んだりすることができた。モデルを真似ることを動機付けとし、自分たちなりに「民謡らしい歌い方」を解釈して、課題を見いだしたり考えたりしながら活動したことが一人一人の達成感や成就感につながった。題材計画の中にプロの方の生演奏を２回入れたことは、子どもたちの技能を高め、意欲を高める面で効果的であった。自分たちの学びだけではどうしても解決できない課題を、ゲストティーチャーに質問したり、一緒に歌っていただくことで答えを見付けたりする姿が見られた。「民謡とは、きれいな声というよりも迫力のある声だと分かった。声を出してはみたけれど、やっぱり迫力のある声には届かなかった。自分も民謡を受け継いでいる人みたいに迫力のある声を出したい。」「民謡は、合唱と違う歌い方で思ったより難しく感じた。でも、伸びやかな歌声は聴いていて気持ちよかった。自分もそんな歌声を届けたい。」「本物の方にまた来てもらって分かったが、まだまだ声量もないし節回しも下手なので、レベルアップできることが分かった」という子どもの振り返りにも成果が表れていた。

このように、ゲストティーチャーによる生演奏が学ぶ意欲の向上に大きくつながることが明らかになった。ゲストティーチャーの活用は、よりよい表現を目指す子どもたちにとって明確な道しるべとなり有効である。また、活用するタイミングが大切であると考える。

(2)　モデルに近付く　～見取って、真似て、自覚して～

３年次の実践では、よりよい音楽表現を目指し、表現力の向上につながるように、音楽活動の中で自分にとってのモデルを見付け、表現に取り入れることを重点としてきた。５年生の実践では、２つのレベルのモデル（プロ・仲間）の設定が「学びのものさし」を働かせる手立てとなった。プロの方と一緒に歌っていただいて節回しや拍のコツをつかみ、技能が高まったところで各グループの発表。そして、よい点や成長した点を見取って伝え合う中で、「お互いのよい点を取り入れたい」「身近なモデルにも近付きたい」という思いにつながっていった。また、「演奏者」「聴き手」になり演奏したり聴き合ったりする活動では、自己と他者の演奏を比較しながら、根拠をもって感想を発言できるように、「聴き手」の聴く視点を「声の出し方」「節回し」と明確にしたことで、表現のよさを認め合う姿も見られた。この活動を通して、仲間のよさや真似してみたい点（自分にとってのモデル）を見付けることができたのである。さらに、学んだことを生かし「民謡」を学習発表会でたくさんの方々に披露できたことが､学んだことの意味や価値を自覚するとともに、達成感や成就感を味わうことにつながった。

これらの手立てが連動し、子どもたち一人一人が民謡らしさを意識し、みんなで作り上げるよりよい表現を追究できていたのではないかと考える。

2　課題　「こうなりたい」を実現するための力

生演奏や本物に触れることで、目の前のよいモデルから学ぶことは多く、自分もこうなりたいという向上心を高めることはできた。しかし、音楽活動の具体的目標を達成していくための表現の引き出しが子どもたちに十分備わっているとは、まだ言えない。次年度もさらによりよい表現に向けて子どもたちの表現の引き出しが増えていくような学習過程を工夫していくことが課題である。子どもたちの音楽に対する価値観が広がっていくことを期待し、題材によっては生演奏や本物に触れる授業構想を模索したい。